

## 夜間定時制高校での学習意欲を喚起する社会科授業の試み

### —自作の紙芝居を用いて—

森 眞一郎\*

#### 1. はじめに

本稿では、さまざまな学習歴や生活環境をかかえつつ夜間定時制高校に通ってくる生徒たちが、「社会科を学ぶことは楽しい。」と感じることができる授業実践の試みについて報告し、その意義についての検討を行なう。ここでは、楽しく学ぶためのツールとして、教師が自作する紙芝居を活用する。

かつて夜間定時制高校は、おもに勤労少年のための学びの場として機能していた。しかし現在では、その役割は変化し、そこに通ってくる生徒は、一人一人が実にさまざまな顔と背景とを持つにいたっている<sup>1)</sup>。本授業の実践校においても、在籍者の年齢層をみると、十代から壮年までまちまちであるし、また、いわゆるニュー・カマーとよばれる外国籍生徒も多数在籍している。このため、高校での学習のためのレディネスに関しても、非常にふぞろいな状況がある。

こうした生徒たちを前に、いざ社会科を教えようとする、どうなるのだろうか。教科書には、多くの生徒にとって難解な語句が並び、ことばに頼った教師の説明は、なかなか彼らの中に入っていくにくい。そして、「先生、さっぱりわからへん。ぜんぜんやる気がおこらんわ。」ということばに授業の行く手をさえぎられかねない。実際に筆者は、幾度となくこうした経験をしている。そこで、授業の中の各ポイントにおいて、イラスト、絵図や、提示用パネルなどの画像教材を適切に活用すると、その授業の内容に対する理解が進み、授業が盛り上がることも多い。社会科の授業においては、こうした画像教材は、授業を楽しくわかりやすいものとするために、欠

くこのできないものであるといえよう。また、教師がちょっとしたイラストを黒板に書いて説明すると、「ああ、わかった。」「へー。」といった反応が帰ってくることもある。

そこで筆者は、社会科授業で自作の紙芝居を使ってみようと考えた。その授業で学ばせたい一連の言説を画像化し、ストーリー化してしまえば、一日の仕事を終えて登校してくる、多様な顔を持った生徒たちに、より楽しく、よりわかりやすく学んでもらえるのではないかと考えたのである。

これまでも紙芝居と高校生の学びとの関係性については、実践を経て肯定的にとらえる見方がいくつか紹介されている。たとえば村山(2003)は、高校の国語科授業の導入において、民話の読み聞かせの発展として「絵」を加えた紙芝居の実演に関する報告を行なっている。村山は、授業前、生徒たちは紙芝居に興味を示さなかったものの、実演後には紙芝居の楽しさを堪能し、次の紙芝居を楽しみにするようになったと報告している。また真野(2008)は、高校での平和教育の時間において紙芝居の実演を試みている。当初、生徒たち、教員たちの中から、「紙芝居など、幼すぎないか。」という懐疑的な声が聞かれたものの、紙芝居実演後には、平和や命の尊さについて真剣に考える声が聞かれ、しっかりと手応えがあったと報告している。

これらの国語科、あるいは平和教育における実践からは、高校生に紙芝居がしっかりと響いたことが見てとれる。画像教材との縁が深い社会科においても、紙芝居の活用の有効性を検証し、夜間定時制高校での学びを支援する教材と

\*三重県立四日市工業高等学校

しての可能性を検討してみることは有意義であるといえよう。

## 2. 授業実践校の状況

四日市工業高校定時制は、三重県における唯一の定時制工業高校であり、戦前からの長い歴史を有している。しかし、近年入学者が減少傾向にあり、定員320名のところ、在籍生徒は159名（2009年9月1日）である。そのうちブラジル籍、ペルー籍などのいわゆるニュー・カマーの生徒は、およそ15パーセントを占めている。こうした外国籍入学者数は、年を追って増加する傾向にある。

生徒の多くは、なんらかの仕事に就いている。

仕事内容はさまざまだが、野外での作業や工場労働など、比較的体力を消耗する仕事についているものが多い。ほかには、サービス業への就労者もみられる。かれらは、忙しい時期には長時間労働を強いられることもある。またまれに、授業中に生徒の携帯電話が鳴り、仕事場に呼び戻されてしまうことさえある。このため、かなり不安定な心身の状態での授業にのぞまざるをえない生徒も少なくない。

生徒たちの学力の獲得状況は、実に多様である。学習態度に関しては、まじめに授業に取り組める生徒が多いが、一方で、疲労や睡魔により、授業に取り組みづらい状況がみられることもある（表1）。

表1 授業に臨む生徒の状況についてのアンケート結果

※ この調査は2008年5月2日の授業で3年1組12名を対象に行った。単位：人

問：あなたは仕事をしていますか。	している。……………	11
	していない。……………	1
問：一日に何時間働いていますか。	9時間……………	1
	8時間……………	4
	7時間……………	1
	6時間……………	1
	4時間……………	3
	一定しない……………	1
	無回答……………	1
問：仕事はきついですか。	かなりきつい。……………	1
	まあまあきつい。……………	6
	それほどでもない。……………	4
	楽だと思う。……………	0
	無回答……………	1
問：あなたは今日、疲れていますか。	とても疲れている。……………	1
	まあまあ疲れている。……………	8
	それほど疲れていない。……………	2
	まったく疲れていない。……………	1
問：あなたは今日、眠いですか。	とても眠い。……………	4
	まあまあ眠い。……………	5
	それほど眠くない。……………	1
	まったく眠くない。……………	2

なお授業は、1時限が90分で行われており、始業は午後5時25分、放課は午後8時55分である。社会科の科目は、1年次に現代社会、3年次に地理A、4年次に世界史Aが担当されている。

### 3. 授業の実際

前述の観点から筆者は、日常的に自作の紙芝居を社会科授業に用いている。これらは、手書きの絵による純粋な形での紙芝居が多い(図1)。



図1 紙芝居の例  
『シュリーマンとギリシア神話』

このほか、コピーにより引き伸ばした写真を用いたフォト・ストーリーの形式をとるものもある。また、学習マンガや、市販の雑誌やコミック本に掲載されているマンガをコピーして、授業に活用しやすい物語として仕立て直すこともある(表2)。

#### (1) 公民科での授業実践例—現代社会

##### 単元「日本国憲法の制定」での実践

##### a) 教科書単元の内容と構成

本単元は、使用教科書(「新版現代社会」実教出版)の第2章「日本国憲法の基本的性格」に設定された単元1~8のうち、単元1「日本国憲法の制定」にあたる。この単元は、「明治憲法下の政治」および「日本国憲法の成立」の2つの小テーマに分けて説明されている。この単元ではいくつかのキーワードを用いて、明治憲法の特徴と、この憲法下における軍部の独裁、第二次世界大戦への突入といった史実が簡略に記述されている。さらに、敗戦から日本国憲法の制定への歩みが、年表を用いて時系列的に概観されたうえで、この憲法の基本原則や改

表2 自作の紙芝居の例

紙芝居の題目	形態	引用文献など	実践科目
アイデア論	手書き	—	現代社会
日本国憲法の成立	フォト・ストーリー (文献・新聞からの複写)	『一億人の昭和史』 毎日新聞社 1975年ほか	現代社会
頻発する冤罪事件の背景	コミックマンガの写し	『ミナミの帝王』68, 69 天王寺大・郷力也 日本文芸社2004年	現代社会
津祭りの唐人踊り	フォト・ストーリー (文献からの複写)	『まつり・祭・津まつり』 まつり・祭・津まつり展実行委員会 2003年	地理A
サンゴ礁の島の暮らし	フォト・ストーリー (筆者撮影)	—	地理A
ギリシア神話の神々	手書き	—	世界史A
中華帝国の成立と変遷	学習マンガの写し	学習マンガ『中国の歴史』1~8 永澤和俊監修・貝塚ひろし画 集英社1987年	世界史A

正手続きについてふれられている。

b) 授業の展開

ここでは上述の小テーマのうち、「日本国憲法の成立」を扱った授業について報告する。筆者は、日本国憲法の成立と第二次世界大戦の終結とが、時期的に非常に近接し

ていることに気づかせたうえで、このふたつの大きなできごとの間には、深い関係があることを理解させたいと考え、授業を構成した。授業では、写真資料や新聞紙面などから加工し、作成した30枚の紙芝居を用いた(表3)。

表3 「日本国憲法の成立」授業で使用した紙芝居一覧

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 戦災直後の津市街</li> <li>・ 原子爆弾投下後の広島市街</li> <li>・ 原子爆弾投下後の長崎市街</li> <li>・ 焼夷弾が放つ閃光</li> <li>・ 日中戦争で敵を処刑した日本軍兵士</li> <li>・ パールハーバーの空撮</li> <li>・ 海に行く戦艦大和</li> <li>・ 国民学校での軍事教練</li> <li>・ 学徒出陣式</li> <li>・ 特殊潜航艇</li> <li>・ 特攻機の攻撃を受ける米軍艦</li> <li>・ 特攻隊員たちの遺影</li> <li>・ 攻撃を受けて炎上する戦艦大和</li> <li>・ 東京大空襲翌日の市街</li> <li>・ 東京大空襲の犠牲者①</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 東京大空襲の犠牲者②</li> <li>・ 厚木飛行場に降り立ったマッカーサー</li> <li>・ 米軍占領下の東京市街地</li> <li>・ バーで米軍兵士を接待する女給たち</li> <li>・ 闇市</li> <li>・ バラック</li> <li>・ 戦災孤児</li> <li>・ 日本軍の飛行機の焼却</li> <li>・ B級戦犯の銃殺</li> <li>・ A級戦犯への判決を報じた新聞紙面</li> <li>・ 昭和天皇とマッカーサーが並んだ写真</li> <li>・ 昭和天皇崩御を報じる新聞紙面</li> <li>・ 人間宣言後に全国を巡幸する昭和天皇</li> <li>・ 日本国憲法の公布記念祝賀会</li> <li>・ 「戦争の放棄」を啓蒙するイラスト</li> </ul>
--	--

実際の授業では、まず筆者は紙芝居の一枚目である、『戦災直後の津市街』を提示した(図2)<sup>2)</sup>。この段階ではとくに解説は行わず、この写真は、いつ、どこを写したものだと思うかを、生徒たちに問いかけた。すると、「戦争やろ?」あるいは、「原爆かな?」といった声が、返ってきた。そこで筆者は、「国道23号線」や、「津市役所」、「大門通り

商店街」といった、三重県民にとってはなじみのある、県庁所在地「津」市内の地名を、写真に写された廃墟のなかに差し示した。ここで何人かの生徒から、「これ、ほんまに津?」「めっちゃひどいやん。」といった声が聞かれたので、続けて、『原子爆弾投下後の広島市街』『原子爆弾投下後の長崎市街』の各写真をもとにした教材を提示した。戦災の様態や被害の程度には差があると思われるものの、これらの写真はどれも、焦土と化した都市景観を描写しており、それぞれがどの都市のものなのか、容易には見分けがつかない。これらを並べて提示することによって、戦争は、広島や長崎といった、三重県から離れた場所だけで行われたのではなく、まさに身近な場所において行



図2 紙芝居の例『戦災直後の津市街』

われていたのだという認識を持たせることができたのではないかと思われる。これにより、生徒たちがこの単元の内容に興味をもてるようになることが、導入としてこれらの教材を提示するねらいであった。

続けて、残りの紙芝居を用いて第二次世界大戦の敗戦から日本国憲法成立までの足取りを概説しつつ授業を進めた。この中で生徒たちからさまざまな疑問や感想が出される、あるいは生徒間でのやりとりがおきるといった場面もみられた。筆者はそれらを拾い上げつつ、解説を補足しながら授業を進めた。ここでは、B・C級戦犯がたどった過酷な運命に対して同情する言葉が発せられたし、戦後、昭和天皇が国民に囲まれながら巡幸する姿からは、平和の到来に対する安堵感を読み取る発言もみられた。こうした生徒たちの反応から、日本国憲法の成立と悲惨な戦争との間に深い関係があることを理解することができたのではないかと感じられた。

## (2) 地歴科での授業実践例—地理 A

単元「生活の舞台としての地形」での実践

### a) 教科書単元の内容と構成

本単元は、使用教科書（「地理 A」東京書籍）の第 1 章「世界的視野から見た自然環境と文化」の中の「生活の舞台としての地形」に設定された単元 1～3のうち、単元 3「さまざまな地形と人々の生活・環境」にあたる。この単元は、「生活の場をあたえてくれる地形—変動帯の地形と災害」および「人間がもたらした自然環境の破壊—地球環境の保全と地形」の 2 つの小テーマによって構成されている。ここでは、変動帯において河川の浸食や堆積によって形成される地形、沈水あるいは離水海岸の地形、サンゴ礁地形、氷河地形やカルスト地形などについて概説されている。さらに、そこで営まれている生活と、それをおびやかす災害

について記述されている。また、近年深刻化しているさまざまなかたちでの環境破壊の実態が描き出され、環境保全に関する課題が提示されている。

### b) 授業の展開

この教科書に見られる記述から、本稿では「サンゴ礁」をとりあげ、この地形の特徴とそこで営まれている暮らしを題材とし、「サンゴ礁の島の暮らし」と題した授業を構成した。本授業では、沖縄県にある小規模な離島である伊平屋村（いへやそん）を事例地域とした。

そして、その特徴的な自然条件のもとで、いかなる形をとって、地域の人々による工夫と努力がなされているのかを考察させたいと考え、授業を構成した。この授業のために準備した紙芝居教材は 18 枚であり、筆者が作図した地図および撮影した写真から作られている。これらは、①「沖縄県伊平屋村の水陸の自然と村民の暮らし」②「モズク養殖の実際と漁業者たち」③「モズク養殖の礎を築いた糸満漁民」の 3 つのカテゴリに分類される（表 4）。まず、①のカテゴリに属する何枚かの紙芝居を提示したところ、写真の所々に授業者である筆者が写っているの、生徒たちから、「あれっ、写ってるの先生やんか。」という反応があった。そこで、これらは数年前、沖縄県の離島において、筆者が地域調査を実施したときの写真であることを説明した。そして、島の位置や自然についての概説を行った。また、毎夕、女性が腰まで海につかって貝や海草を採る、「おかず採り」の慣習について説明し、海と仲良くして、そこからの恵みを活用する暮らしが守られているということを話した。続けて、上記の②のカテゴリの紙芝居を提示し、話をした。ここで使われている写真は、筆者が漁船に同乗させてもらってモズク養殖の現場に行き、潜水作業を手

表4 「サンゴ礁の島の暮らし」授業で使用した紙芝居一覧

カテゴリ	使用した紙芝居教材
①沖縄県伊平屋村の水陸の自然と村民の暮らし	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄県伊平屋村の地図</li> <li>・サンゴ礁と緑の島の全景</li> <li>・島の子どもと筆者</li> <li>・赤瓦とサンゴの石垣を用いた民家</li> <li>・民家の門柱にのったシーサー</li> <li>・母ヤギと子ヤギ</li> <li>・夕食の貝や海藻を採る主婦</li> <li>・掲げられた標語「日曜日は島クトゥパで」</li> <li>・「棒踊り」の練習に励む青年団員たち</li> <li>・満潮時のサンゴ礁</li> <li>・干潮時のサンゴ礁</li> </ul>
②モズク養殖の実際と漁業者たち	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サンゴ礁に張り出されたモズク養殖網</li> <li>・水中のモズク養殖網</li> <li>・水中でのモズク養殖作業</li> <li>・モズク養殖作業を終えた漁業者たち</li> </ul>
③モズク養殖の礎を築いた糸満漁民	<ul style="list-style-type: none"> <li>・糸満漁民に売られた経験をもつKさん</li> <li>・夕食のおかず獲りのために小船を出すKさん</li> <li>・ブダイのウロコをそぎ落とすKさんと奥さん</li> </ul>

伝ったときに撮影したものである(図3)。

最後に、上記の③のカテゴリの教材を活用して授業内容を展開した。ここでは、糸満漁民であったKさんが、潜水用の単眼ゴーグルである「オキナワメガネ」をかけてアップで写っている写真のインパクトが大変強かったようで、「そのおじいさんはだれ?」といった反応が生徒たちからあった。そこで、Kさんのひととなりについて以下のように話して聞かせた。『Kさんは10歳のときに船乗りだったお父さんが亡くなりました。それでKさんは沖縄県糸満町の親方のところに売られて、きびしく潜水漁を仕込まれました。サバニという小舟で沖縄本島周辺から八重山諸島までを渡り歩いて魚やサンゴ、ウミガメなどをとっていました。素潜りで、40メートル以上の深さまでもぐったこともあるそうです。20歳で軍隊に入るときに、やっと親方から自由の身となりました。戦後、Kさんは伊平屋村に帰って漁師をしていましたが、1970年代末からモ

ズク漁やモズク養殖がさかんになったので、その潜水技術をいかして、村のモズク養殖の核となって活躍しました。』と話した。そして、潜水作業が多いモズク養殖にとって、Kさんのような糸満漁民と呼ばれる人たちの存在は、なくてはならないものだったことを付け加えた。

この授業では、最後まで生徒たちの集中は途切れなかった。そして終了時に、「モズクが作られているサンゴ礁の島にいてみたいかどうか。」という問いかけをしたとこ



図3 紙芝居例  
『モズク養殖作業を終えた漁業者たち』(中央は筆者)

ろ、大半の生徒が行ってみたいという答えを返してきた。このことから、生徒たちはこの授業を通じて、サンゴ礁の島の自然と暮らしに多少なりとも興味を持ったと考えられる。

またこの授業では、いくつかの簡単な問いを記したプリントも配り、筆記でそれに答えさせた(表5)。『モズク養殖にたずさわっている漁師さんたちについて、思ったことを書いてください。』という問いに対しては、写真に写された漁業者たちの外見や筆者が語ったエピソードに対する率直な感想がいくつか出された。「常に苦勞していると思う。」「大変そう。」「えらいなー。」といった感想もみられる。これらのことばから、サンゴ礁の海に潜り、必死にモズクを育てる離島住民の苦勞に思いがいたった生徒がいることがわかる。一方、『Kさんについて、思ったことを書いてください。』という問いに対しては、その潜水能力の高さや、高齢

にもかかわらず海と向き合う姿に対する素直な感動をあらわす答えがみられた。また、「小さいころ売られてしまったのに前向きに考える力がすごい。」という感想もみられた。これを書いた生徒は、Kさんの、「逆境の中でも、希望を持って歩いていく力」を読み取っているのであろう。自らがやはり勤勞者である生徒たちによるこうした記述からは、同じようにがんばっている人びとへのまなざしが感じられる。

この授業では、サンゴ礁の島の自然や人材といった、「ここにあるもの、ここにしかないもの」を生かして、力を合わせながら生きる住民たちの、工夫や苦勞に気づかせたかったが、そこに思いがいたった生徒も少なくはないと感じられた。

### (3) 授業を終えて

上述した2つの授業で生徒たちは、居眠りをしたり、机に伏せたりすることなく90分間の授業を終えることができた。

表5 「サンゴ礁の島の暮らし」授業後の生徒の感想

※この調査は2008年6月20日の授業で3年1組14名を対象に行った。単位:人

<p>問:モズク養殖に携わっている漁師さんたちについて、思ったことを書いてください。</p>	<p>○黒い。 ○人間ばなれしすぎている。 ○常に苦勞していると思う。 ○大変そう。 ○えらいなー。 ○漁師は昼めしを食べないということがわかった。</p>
<p>問:Kさんについて、思ったことを書いてください。</p>	<p>○やっぱ黒い。 ○まだ続けているのかな。 ○元気な人。 ○80代でも漁師していることに驚いている。同じ人間とは思えない。 ○40mまで潜っていけるのがすごいと思った。 ○90才に近いのに90才のおじいちゃんにみえない。70才ぐらいにみえる。 ○元気なおじいさんだ。長生きしてもらいたい。 ○潜る力がとてもすごいと思った。 ○小さいころ売られてしまったのに前向きに考えるところがすごいと思った。 ○すごく年をとっているのにすごいと思った。</p>

1つ目の授業では、戦争の悲惨さを表現した紙芝居を示すと、写真をもっとよく見ようとして、思わず席を立ち、筆者のところへ寄ってくる生徒も複数いた。また生徒と筆者、あるいは生徒間での質問や感想などのやりとりも、いつもの授業にもましてさかんであった。

2つめの授業の終了時には、紙芝居を用いた授業形態について生徒たちがどのように感じているのか、アンケートをとった(表6)。このアンケート結果から、各項目についておよ

そ半数の生徒が、社会科の授業での紙芝居を、肯定的にとらえているといえよう。工業高校における社会科の授業であるというやや厳しい条件を考慮すると、本授業はそれなりに受け入れられていると判断することができるのではないかと思われる。

表6 紙芝居を用いた授業への生徒の評価

※この調査は2008年6月20日の授業で3年1組の14名を対象に行った。単位:人

わかりやすいかどうか。	わかりやすい。	7
	普通。	7
	わかりにくい。	0
楽しいかどうか。	楽しい。	6
	普通。	8
	楽しくない。	0
今後も続けてほしいかどうか。	続けてほしい。	8
	どちらともいえない。	6
	やめてほしい。	0

#### 4. おわりに

「社会科の面白さは教材の面白さだ。」といわれるように<sup>3)</sup>、写真や挿絵、図表などの視覚を活用した教材は、生徒の興味を喚起しやすく、その有効な活用によって、楽しい社会科授業の展開が期待できる。また近年では、パソコンを用いた、ICT (Information and Communication Technology) を活用した授業がさかんに行われ、効果をあげている。これら既製の教材や教具に比して、自作の紙芝居は、夜間定時制高校の社会科授業に活用するうえで以下のような利点を有していると思われる。

第一に、自作の紙芝居には、手作りの魅力がある。たとえば本授業で使用した教材『戦災直後の津市街』(図2)のように、郷土にかかわった題材を取り上げて加工することによって、生徒たちの関心を引き、凝視させることが可能で

ある。あるいは、『モズク養殖作業を終えた漁業者たち』(図3)のように、写真の中に授業者が登場することも生徒の興味を引くであろう。また図1のような、ややへたくそな自筆の絵は、生徒の笑いを誘うこともある。「先生がまた、へんな紙芝居を作ってきたで。」とか、「先生、今日は、紙芝居はないの?つまらんなあ。」といった声が授業の冒頭で聞かれることもある。このように、生徒の視覚に直接はたらきかける紙芝居は、かれらの学習意欲を喚起することにおいて、有効なのではないかと考えられる。

第二に、教師が教材を自作できるため、眼前の生徒の、学習や生活の実態に合った教材作りが可能である。夜間定時制高校においては、生徒たちが抱える多様な生活状況と学力的課題とがきめこまかく考慮された教材を、毎日の授業のために準備することが、教師に求められる。



学習者であり、勤労者でもある生徒が有する視線とかみ合った教材が準備できれば、そこから疑問や感想、意見などが掘りおこされ、生徒と教師、あるいは生徒間において議論が展開される可能性がある。とくに近年の生徒数減少にもなって、夜間定時制高校では、「少人数教育」が、結果として実現していることが多い。このため、教師と生徒による車座での授業も可能である。日々の授業では、見せた紙芝居をきっかけにして話がはずみ、その授業の学習内容から、自分の仕事のことや家族のこと、時には人生につまずいた経験などを、生徒たちが腹を割って話してくれることもある。そしてこうしたやりとりから、その授業がふくらみや深まりをみせることも少なくない。そこで生徒は、「自分たちと先生とで、授業を作っているんだ。」

という手ごたえをえて、社会科に対する学習意欲を増大させているという感触がえられることもある。すなわち、夜間定時制高校における紙芝居を用いた社会科授業は、かつての原っぱでの紙芝居がそうであったように、夜の教室に集まってくる生徒たちと演じ手の教師とが、同じ空間を共有し、場を盛り上げながら授業を作っていく教授方法であるといえよう。

以上の点から、仕事を終えて登校してくる、夜間定時制高校の多様な生徒たちを集中させ、かれらが「楽しい」と感じることができるような手軽な社会科教材として、自作の紙芝居を位置づけることができよう。さらにいうと、生徒と教師とのやりとりを促し、社会科授業を深めるツールとしても、夜間定時制高校での自作の紙芝居の活用は有効なのではないかと考えられる。

#### 文献

- 有田和正 (1999) : 『21 世紀授業改革への提案 2 「生きる力」をはぐくむ社会科授業』 明治図書, p155-172.
- 千葉勝吾 (2008) : 格差社会を乗り越える. 婦人之友. 103 (3), p131-134.
- 津平和のための戦争展実行委員会 (1989) : 『津平和の戦災 記録と回想』 津平和のための戦争展実行委員会, 176p.
- 真野朋子 (2008) : 高校生に紙芝居を演じて. 子どもの文化. 40 (3), p42-48.
- 村山祐治 (2003) : 高校生と紙芝居ワークショップ. 子どもの文化. 35 (9), p34-48.

#### 註

- 1) 現在の夜間定時制高校がかかえるこうした状況について、千葉 (2008) は、「…80年代には、…いわゆる勤労学生の比率は低下し、なんらかの理由で全日制高校に入れなかった不本意入学者が増加するようになってきた。」 「在学する生徒像も正規雇用の勤労学生はごく少数となり、さまざまな背景や課題をもった生徒で占められるようになった。退学率も高くなり、卒業までこぎ着けるのは、5割という夜間定時制高校も少なくない。」と述べ、社会に広がる格差を背景として夜間定時制高校の生徒像が、複雑さを増していると分析している。
- 2) この写真は、津平和のための戦争展実行委員会 (1989) より転載した。
- 3) 有田 (1999) より。